

## 仮説：やってみれば何でも楽しい。

第14期生 佐藤 祐菜

私は慶應女子からの内部生である。ゆえに、高校3年間と大学1・2年の間は、ただただ遊んでばかりいた。そんな私は、「なんか小野ゼミ楽しそう！！このまま遊んでばかりじゃ将来ヤバそうだし、ちゃんと勉強してみよっかな！」という驚くほど単純な気持ちで小野ゼミに入会した。小野ゼミに入会した私は、小野ゼミの忙しさに圧倒されて、辛い思いをしたかと思いきや、全く違った。入会時に思っていたとおり、ただひたすらに楽しい毎日であった。

私は、昔から好奇心だけは人一倍旺盛で、何でもすぐやりたがる。「どんなに大変そうなことでも、やってみれば何だかんだ全部楽しいだろう。」私は昔からこんなことを考えるハッピー野郎なのだ。それと同時に、私はギリギリで生きすぎ人間でもある。「祐菜さんさすがにそろそろ卒業エッセイ書いてください！」何度TK(15期の後輩)に怒られたことだろうか(ごめんなさい)。そんな私は、小野ゼミの2年間で、本当にたくさんのコンテンツに参加し(英論活動, KUBIC, 天然ガスマケコン, GBCC, 神戸マケコン, KSMS, GFMC, AMAなど)、全て驚くほどギリギリまで作業をし、ありえないほど小野先生、大学院生、13期さん、同期のみんなに迷惑をかけた。しかし、これらの活動が心の底から本当に楽しかった。その中でも特に楽しかったと感じる活動は、やはり英論活動である。オーストリアで行われる国際学会での発表を目標に、私たち英論チームはルールを作り、毎日集まった。「時には」どころではなく、本当にたくさん喧嘩もした。「いや普通にその論文が言ってること全然違うじゃん。」「誤字脱字チェックばっかやってないで、頭使って仮説考えてよ。」「あのさ、夜Skypeで話し合おうって言ってるのになんでいつも寝てんの?」こんな会話が毎日のように続いた。でも、そうやってぶつかり合いながらも、毎日全員集まって、毎日ジュース男気じゃんけんもして(合計いくら使ったんだろう…)、毎日本気で論文に向き合ったことで、オーストリアの学会だけでなく、念願のAMAでの論文発表も実現したのだろう。ありがとう。そして、なにより、論文だけでなくビジコンなどでもいつも期限ギリギリに添削を依頼する私に、自らの時間を犠牲にしてまで、本気で向き合ってくれた小野先生には、感謝の気持ちと謝罪の気持ちでいっぱいである。

論文もビジコンも学会発表も小野ゼミの活動は全部本当に楽しかった。私が「楽しい」と感じ続けられたのは、私の周りにいるすべての方々のおかげである。小野先生は、私にたくさんの機会を与えてくださり、たくさん面倒を見てくださった。社会に出たらこんなに恵まれた環境で過ごすことはできないだろう。4月からは、自分の力で環境を作り、人に頼ってばかりではなく、自分自身の力で新しい価値を生み出せる人間になりたい。そして残りの人生何をするにも、周りの人たちへの感謝を忘れず、全力ですべてを楽しみきる。私のこの2年間の小野ゼミ活動をもって、仮説「やってみれば何でも楽しい」は支持された。